

十二月

計

三三三三二

三六一九一

之に由りて人の生理上及社會上の關係を視るを得へしと云へり則ち出生の最も多きは一月之に次くは三月十二月十一月最も少きは六月七月なり一月の出生は四月の受胎なり三月の出生は六月の受胎なり十二月十月十一月は三月一月二月の受胎なり而して六月七月の出生は九月及十月の受胎あり其大數に於て陽春受胎するもの多く晩秋受胎するもの少きを知るへし其間種々なる社會的狀態の爲め影響を受くると亦少なからずそは一層精密なる調査を爲すにあらざれば知り得難しとす今各國の類例を示さん(但し一ヶ年分を千二百に改算す)

月	佛蘭西	日耳曼	伊太利	白耳義	和 關	十四ヶ國平均
一月	一〇五	一〇三	一〇七	一〇五	一〇六	一〇七
二月	一一〇	一〇五	一一四	一〇三	一一五	一〇七
三月	一〇九	一〇三	一一〇	一一二	一一二	一〇七
四月	一〇六	一〇〇	一〇六	一〇四	一〇四	一〇三

五月	九九	九七	九五	一〇一	九四	九九
六月	九五	九五	八九	九五	八六	九四
七月	九六	九六	九一	九六	八六	九三
八月	九六	九八	九三	九八	九六	九五
九月	九七	一〇四	一〇〇	九六	一〇三	一〇一
十月	九五	一〇〇	九八	九七	九九	九九
十一月	九七	一〇〇	九八	九五	九九	九七
十二月	九五	九九	九九	九八	一〇〇	九八
計	一一,二〇〇	一一,二〇〇	一一,二〇〇	一一,二〇〇	一一,二〇〇	一一,二〇〇

右最終に掲けたる數は蘇蘭佛蘭西日耳曼伊太利希臘西班牙和蘭瑞典那威丁抹ゼネウバアルゼリヤハンガリー白耳義の十四ヶ國處の數なり之に由ても春夏に受胎多きを知るへし唯た秋の出生は九月に多く九月の出生は十二月の受胎あり私生兒に在りては此講究殊に必要なり

死亡

死亡統計は人口運動調査の科目中最も貴重なるものなり人の健否は人類にまで至大の關係を有し而して死亡統計及死亡歩合は公共の健否を指示する信憑すべき徵候なるか故なり死亡歩合とは一ヶ年の死亡總數を國民の總數に比し毎千人に何人死去すと云ふとを表示するものなり而して其講究の要點は左の如し

死亡歩合を算出して年々歳々の多少増減を知ると

死亡の原因を講究して之れか救済の方策を講ずると(各種疾病暴行怪我自殺等)

出生の歩合か死亡の歩合に及ぼす影響を知ると

死亡歩合の人口増加に及ぼす影響を知ると

流行病と死亡歩合との關係を究むると

職業と死亡の關係を究むると

時と場處と死亡との關係を究むると

四季と死亡の關係を究むると

時候饑饉戰爭疫癘の死亡に及ぼす勢力を究むると

年齢に従つて死亡の歩合を究むると特に小兒の死亡を講究すると

男女と年齢とを區別して之れか死亡の歩合と原因とを究むると

死亡増減の大勢と之れか原因とを究むると

健康の標準として死亡歩合を利用すると

以上掲ぐる所の中には自殺、被殺、所刑、節欲過度、怠惰、遠慮なきと、闘争等の爲めの死去、又豺狼虎豹毒蛇毒蟲の爲め其命を終ると、又間接に鳥獸昆蟲に食料用の動植物を害せられ或は其身軀に寄生蟲生し爲めに其生命を墜すとあり是れ皆此に研究を要する所なり蓋し各個人の生命は其短きは一秒時より其最も長きは一百年に達するなり之を譬へば人の生命は線の如し其短きは點にして其長きは長線として現はるゝなり而して其男女に由り其貧富に由り其階級に由り其住地に由り其品行に由り其飲食に由り其醫藥に由り其攝養に由り之に長短の差異を生ずるか故に如何なる道に由れば能く長生するを得るや又能く之を長生せしむるを得るやを極め其極之れか平均を高めんとするに在り

一社會に於ける一定時の平均命數は元より同一なり然れども之を組織する各人の命數は勿論限りなく區々なり一般死亡の法に従へば人生は出生後五年までは

死亡統計は人口運動調査の科目中最も貴重なるものなり人の健否は人類にまで至大の關係を有し而して死亡統計及死亡歩合は公共の健否を指示する信憑すべき徵候なるか故なり死亡歩合とは一ヶ年の死亡總數を國民の總數に比し毎千人に何人死去すと云ふとを表示するものなり而して其講究の要點は左の如し

死亡歩合を算出して年々歳々の多少増減を知ると

死亡の原因を講究して之れか救済の方策を講ずると(各種疾病暴行怪我自殺等)

出生の歩合か死亡の歩合に及ぼす影響を知ると

死亡歩合の人口増加に及ぼす影響を知ると

流行病と死亡歩合との關係を究むると

職業と死亡の關係を究むると

時と場處と死亡との關係を究むると

四季と死亡の關係を究むると

時候饑饉戰爭疫癘の死亡に及ぼす勢力を究むると

年齢に従つて死亡の歩合を究むると特に小兒の死亡を講究すると

男女と年齢とを區別して之れか死亡の歩合と原因とを究むると

死亡増減の大勢と之れか原因とを究むると

健康の標準として死亡歩合を利用すると

以上掲ぐる所の中には自殺、被殺、所刑、節欲過度、怠惰、遠慮なきと、闘争等の爲めの死去、又豺狼虎豹毒蛇毒蟲の爲め其命を終ると、又間接に鳥獸昆蟲に食料用の動植物を害せられ或は其身軀に寄生蟲生し爲めに其生命を墜すとあり是れ皆此に研究を要する所なり蓋し各個人の生命は其短きは一秒時より其最も長きは一百年に達するなり之を譬へば人の生命は線の如し其短きは點にして其長きは長線として現はるゝなり而して其男女に由り其貧富に由り其階級に由り其住地に由り其品行に由り其飲食に由り其醫藥に由り其攝養に由り之に長短の差異を生ずるか故に如何なる道に由れば能く長生するを得るや又能く之を長生せしむるを得るやを極め其極之れか平均を高めんとするに在り

一社會に於ける一定時の平均命數は元より同一なり然れども之を組織する各人の命數は勿論限りなく區々なり一般死亡の法に従へば人生は出生後五年までは

最も多く死し六年より十年までは之に次ぎ十年より十五年までは最も安寧にして其後再び漸く死者増加し七十年以上に至りては其死者再び小兒の如く多し是より本邦事實を掲げて之を示さん

年紀	男	女	計	人口千に 付死亡	女の死亡 千に付男
明治五年	二〇八〇九二	一九七三一二	四〇五四〇四	一二・二	一、〇五四・六
同 六年	三三五一七一	三一四五四四	六四九七一五	一九・三	一、〇六五・六
同 七年	三五七七五九	三三八八九四	六九六六五四	二〇・五	一、〇五五・七
同 八年	三三八二七一	三一六二九一	六五四五六二	一九・一	一、〇六九・五
同 九年	三一六三二四	二九六六九八	六一三〇二二	一七・七	一、〇六六・一
同 十年	三二四七三二	二九五五七四	六二〇三〇六	一七・八	一、〇九八・六
同 十一年	三一四六三三	二八八六四四	六〇三二七七	一六・九	一、〇九〇・〇
同 十二年	三七四五五七	三四六五九〇	七二一一四七	二〇・一	一、〇八〇・七
同 十三年	三一三六六八	二八九三八七	六〇三〇五五	一六・六	一、〇八三・九
同 十四年	三五一一六四	三三四九〇〇	六八〇八六四	一八・七	一、〇四八・六

同十五年	三四六一一二	三二二二三〇	六六八三四二	一八・一	一、〇七四・一
同十六年	三四八六一四	三二七七五五	六七六三六九	一八・一	一、〇六三・六
同十七年	三六三七七五	三四一三五一	七〇五一二六	一八・六	一、〇六五・七
同十八年	四五三三六一	四三三四六三	八八六八二四	二三・二	一、〇四五・九
同十九年	四八三八五一	四五四四九二	九三八三四三	二四・四	一、〇六四・六
同二十年	三八六一三二	三六七三二四	七五三四五六	一九・三	一、〇五一・二
同廿一年	三八四五一四	三六八三二〇	七五二八三四	一九・〇	一、〇四四・〇
同廿二年	四一三九二六	三九四七五四	八〇八六八〇	二〇・二	一、〇四八・六
同廿三年	四二五〇五九	三九八六五九	八二三七一八	二〇・三	一、〇六六・二

此調査東京府管下小笠原島は明治十年まで琉球國は同十二年まで北海道釧路根室千島北見の四國及伊豆三宅島は十二年の材料を欠き伊豆國大島及薩摩國川邊郡は十七年十八年の材料を欠く

千人に對する死亡明治五年に少きは出生數と均しく二月より十一月までの數なるに由るなるへく六年七年八年に稍多きは米價騰貴と不融通と世の騷擾(佐賀台

灣の役等)とに由るへく十二年及十九年に多きは虎列刺の大に流行せしと十八年十九年は不景氣極度に達せしに由り二十二年に多きは不作の爲め食物高價なりしか爲めならん其十年に西南の戦争ありしに死者の多からざるは少しく疑なき能はず尙講究する所あらんとす而して十年十一年に女子に比して男子に死者多きは戦争の爲めの故ならん

余は此に明治二十二年を本として千人に對する死亡歩合の多少に由りて府縣を列記すへし

府縣	廿年	廿一年	廿二年	府縣	廿年	廿一年	廿二年
大坂	二一九	二三〇	二七七	佐賀	一七三	一八九	一九九
東京	二四七	二五六	二六四	福岡	一七一	一七六	一九九
奈良	二〇〇	二〇一	二五〇	山口	一七九	一八六	一九八
愛知	二〇二	二二四	二三七	高知	一九七	一八五	一九七
京都	一九八	二〇九	二二六	神奈川	一八四	一八四	一九六
滋賀	二〇七	二一五	二二五	千葉	一八六	一八九	一九六

兵庫	一九八	一九八	二二二	栃木	一九〇	一八七	一九六
香川	—	二〇〇	二一九	埼玉	一九六	一八七	一九四
長崎	一六四	一八〇	二一七	富山	二四九	一八〇	一九三
三重	一八六	一九九	二一五	岡山	一八三	一六七	一八八
山形	一九二	一八〇	二一二	宮崎	一九三	一八一	一八八
北海道	一七八	一九五	二一〇	山梨	一七六	一七三	一八四
福井	二二三	一九一	二〇九	岩手	二〇七	一九五	一八四
静岡	一七五	一八九	二〇六	廣島	一九四	一七六	一八四
石川	二一三	二〇一	二〇六	福島	一七九	一七一	一八一
大分	一八三	一九一	二〇六	鳥取	一七一	一七一	一八一
岐阜	一九六	二〇七	二〇五	長野	一六九	一七四	一七八
和歌山	一九五	一七四	二〇三	秋田	一七三	一六四	一七六
島根	一九四	一八八	二〇三	愛媛	一七八	一七九	一七五
群馬	二〇七	二一三	二〇〇	青森	二一一	一七一	一七二

實際統計學 人口

新潟	二〇・一	一九四	二〇〇	茨城	一六・三	一六・五	一六・八
宮城	二一・四	一八・三	一九九	熊本	一六・五	一六・〇	一六・八
徳島	二〇・三	二〇・〇	一九九	鹿児島	一八・八	一八・五	一六・三
沖繩	二一・八	一三・七	一二・二	平均	一九・三	一九・〇	二〇・二

右の表に就て之を視れば大坂東京奈良愛知京都滋賀福井石川群馬新潟徳島の如きは連年比較的死亡者多き地方なり又表末に列せし各地の如きは其死亡歩合割合に少し併し是等のとほ地方に於ける統計調査に對する注意の如何に由り又其原因の如きは年此に注目する衛生家統計家特別の吏員にあらされは説明し難き所なり

今参考の爲め歐洲各國の死亡歩合を示さん

國名	千八百六十年より 同七十年迄の平均	千八百七十年より 同八十年迄の平均	國名	千八百六十年より 同七十年迄の平均	千八百七十年より 同八十年迄の平均
匈牙利	三八・七	四〇・一	佛蘭西	二二・九	二四・三
墺地利本	三〇・四	三一・二	和蘭	二〇・一	二四・三
伊太利	三一・一	二九・七	瑞西	二四・〇	二四・〇

西班牙	—	二九七	白耳義	二二・八	二二・六
日耳曼	—	二七・一	蘇格蘭	二二・二	二一・八
英吉利	二二・六	二一・三	丁抹	二〇・一	一九・三
瑞典	二〇・〇	一八・四	愛爾蘭	一六・八	一八・三

愛爾蘭は國柄の悪しきに拘らず死者の少きは甚た奇異なり然れども今之れか説明を見出さるるか故に又調査して補説すへし

以上諸數に比して本邦死亡の歩合は少き方なり蓋し衛生上状態は各國に比して宜しき方ならん

都市と村落の死亡歩合 此は又講究を要する問題なり明治廿二年人口貳万五千以上市街死亡八百八十九頁に載せられたは就て視るへし蓋し各國ともに村落に比すれば都市に死亡多しと知るへし

歐米名都十數所の死亡歩合は之を左に示さん

倫敦	二一・一	巴里	二八・六	伯倫	二七・六	ウィンナ	二九・〇
彼得堡	五一・四	新約克	二六・二	羅馬	二六・八	マドリッド	三七・四

阿姆斯特ダム二二三七 費府 二〇三三 桑港 一八一

年齢と死亡の關係 余は已に人口千に付平均の死亡明治二十一年に於て十九人なることを示せり今年に於ける死亡者を各年齢級の生存者に配當し各級大に其異なるものあるを示さん但し人口は二十一年十二月三十一日現在にて死亡者は同年中のものなり即ち

人口は三千九百六十万七千二百三十四人

死亡者は七十五万六千三百五十七人

此毎千人死亡歩合は十八人七分四厘なり

但し此死亡数の前に掲げたる數と異なるは年齢別の調査の方三千五百二十三人多きか爲めにして是れ材料の泉源異なるか故なり(統計學雜誌七十二號)さて次の表に於て注意すべきは各年齢に於ける死亡歩合男女に於て異なるとなり即ち五歳以下及十歳以下に於ては男の死する割合多く十歳以上四十歳以下までは悉く女の死亡多きとなり此は此年齢に在つては女子天稟に於て弱點多きか爲めならん懐妊出産の如き其重なるものにして其他種々なる婦人病に罹るもの

多し

四十六歳以上に在りては殆んど皆男子の死亡歩合多し是れ男子の長壽少く女子の多く遺存する所以なり

然るに其次に掲ぐる英國の表に在りては第一に驚く可きは零歳より五歳までの死亡歩合男女其差の著しきとなり次に十歳より二十歳までは女子に比して男子健康なれど其他は悉く男子の方死亡の割合多きとなり是れ本邦に比して一大差異なりとす是に由て之を觀れば本邦人に男子多く歐洲人に女子多き原因の一つは此にもあらんも未だ知る可らず尙ほ一層の考究を必要とす是れ亦偶然の一發見と云ふべし

年齢別	男	女
五歳以下	四九一七	四四四五
十歳以下	六二五	六〇五
十五歳以下	三九一	四〇九
二十歳以下	五七八	六四四
		四六八五
		六二四
		三九九
		六一一

實際統計學 人口

廿五歳以下	七三七	八六四	七九九
三十歳以下	七四七	九〇九	八二七
三十五歳以下	八〇六	九九〇	八九六
四十歳以下	九四〇	一〇九八	一〇〇九
四十五歳以下	一一五六	一一六四	一一六〇
五十歳以下	一四六四	一二二九	一三五〇
五十五歳以下	一九九八	一五七一	一七八九
六十歳以下	二六九三	二一四八	二四二一
六十五歳以下	三八〇三	二九八七	三三八八
七十歳以下	五三八三	四四八七	四九一五
七十五歳以下	七九〇六	六六三〇	七二二一
八十歳以下	一一三九四	九七六七	一〇四六九
八十五歳以下	一六三九四	一四一〇八	一五〇一七
九十歳以下	二三四五八	二一五八七	二二二五六

九十五歳以下	三三三二二	二八三六六	二九九〇六
百歳以下	三五三四〇	三七〇六四	三六五六九
百歳以上	二八〇〇〇	三〇五五六	二九八九七
平均	一八九九七	一八五〇	一八七四

之と同一なる英威兩國の例を示さん其他の國々にも多くの類例存すれども繁冗を厭て此には載せず但し次の數は千八百八十一年乃至八十五年の事實に據る

年齢	男	女
零歳より五歳まで	五九六〇	五〇四八
五歳より十歳まで	五七八	五六二
十歳より十五歳まで	三一六	三三〇
十五歳より二十歳まで	四五六	四七二
二十歳より二十五歳まで	六〇〇	五九四
二十五歳より三十五歳まで	八一八	七九〇
三十五歳より四十五歳まで	一二七四	一〇九〇

四十五歳より五十五歳まで	一九四二	一五二四	二二二
五十五歳より六十五歳まで	三三六四	二七八二	
六十五歳より七十五歳まで	六八七八	五九四六	
七十五歳より八十五歳まで	一四四六〇	一二九四〇	
八十五歳以上	二九六四〇	二六七八〇	
平均	二〇四二	一八二四	

四季と死亡の関係 此に又全國死亡者の月別けを示さんと欲すれど其材料なきを以て亦東京府管下現住人の死亡を示すへし明治二十一年の死亡數は總數三万四千四百三十七人にして其別左の如し

月	男	女	計
一月	一三八九	一二九〇	二六七九
二月	一三五九	一二九八	二六五七
三月	一三一五	一二一八	二五三三
四月	一二二九	一一〇三	二三三二

五月	一三三五	一二八八	二六二三	9
六月	一四八二	一二七四	二七五六	5
七月	一九一〇	一五七二	三四八二	2
八月	二一九八	一八〇五	四〇〇三	1
九月	一七五九	一四四八	三二〇七	3
十月	一五三二	一二二〇	二七五二	6
十一月	一三一七	一二五一	二五六八	10
十二月	一五〇八	一三三七	二八四五	4
計	一八三三三	一六一〇四	三四四三七	

右の表に就て之を視れば其最も死亡多きは八月にして之に次くは七月九月又之に次くは十二月なりされは七八九の炎熱の時候に次て生命に危きは極寒に近き十二月なり之に次くは一月二月の寒時期あるへきにさはなくて十二月に次て死亡の多きは又稍や暖氣なる六月なり而して最も死亡の少きは三月及四月なり是れ陽春の氣萬物發育の時多分の危篤なる病者も一時輕緩を覺へ五月を越へ六月

に至り却て死者を増す所以ならんか然れども寒暑共に之れに由て影響せらるゝは病に由つて其度を異にするのみならず人の死亡は必ず氣候のみに限らす他の事情に由つて影響せらるゝとをも亦思はざるへからず

余は是より小兒死亡のと職業と死亡の關係等を説き更に結婚離婚移住の三大科目を講説し以て本年の講義を終らんと期せしか首めに餘り精しく講述せしか爲め最早紙數餘す所なきを以て本講述は今日此に之を止むるととなれり尙ほ盡さるる所は次回の講義を俟つて補ふ所あるへし且つ人口異動以後は少しく病む所ありしを以て不完全なる點少からざる可し是れ讀者に謝する所なり明治二十五年九月某日

實際統計學終

明治二十六年六月五日印刷
全 年六月八日發行

編輯者 東京市牛込區早稲田 山澤俊夫

發行者 東京市牛込區市谷加賀町一丁目廿三番地 小久江武三郎

印刷者 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 根岸高光

印刷所 東京市牛込區早稲田 秀英舎工場

發行所 東京專門學校

發賣所 東京市神田區一ツ橋通町七番地 有斐閣書房

東京市
東京市
東京市

東京市
東京市
東京市

田

香英合土

田

財單品次

田

田類

田

山野對大

全
平六日

四
十六日